研究報告

官学連携事業としての両親学級の意義と運営推進に向けた課題
－受講当日と出産後のアンケートの分析より－

Significance of Parenting Classes as Government-Academia Collaboration and Issues for Promoting Management
－ An Analysis of Post-Class and Postpartum Questionnaires －

田出 美紀 *　福澤 雪子 *　椎葉 美千代 *
Miki Taide　Yukiko Fukuzawa　Michiyo Shiiba

藤好 貴子 *　渡邉 晴美 *　中西 真美子 **　森谷 由美子 ***
Takako Fujiyoshi　Harumi Watanabe　Mamiko Nakanishi　Yumiko Moriya

要　旨

【目的】B 市との官学連携事業である両親学級において、本事業の意義の明確化と活動評価を行い、教室の運営推進のための課題を見出す。

【方法】同意の得られた参加者に教室参加直後と出産後に属性ならびに出産・育児状況、教室の内容に対する反応、教室に対する意見や感想を質問紙調査した。教室参加直後の調査は、妊婦 126 名･家族 103 名、出産後の調査は、褥婦 65 名・家族 38 名を分析対象とした。本研究は、福岡女学院看護大学の研究倫理委員会の承認後（承認番号 15-4）に行った。

【結果】参加動機は、分娩に関する知識の習得、父親・母親になる準備、育児技術の習得が多かった。受講内容に対する反応は、教室終了直後・出産後共に高い満足感を得ており、講話・演習を通して自信と実感を得て親役割獲得の意識付けとなっていた。今後の教室には実施・経験が得られる内容の増加と、出産後まもなくだけでなく数ヶ月先までの育児について学びたいニーズがあった。妊婦とその家族の妊娠・出産・育児に関する不安の軽減と意識の向上が図れていた。

【考察】今回の結果から B 市の妊婦に対し分娩や育児技術に関する不安を軽減する支援により母子保健向上の一端を担う意義は果たしていたことが示された。今後の教室運営には実践的な内容の要望が多く、親としての意識付けや育児への意欲により自己効力感が増すためと考えられる。また、分娩施設を退院後、児との生活に順応するまでの心身の不調や育児の困難感から、予備知識の獲得や出産後の支援のニーズが高まったと推察される。

キーワード：両親学級、官学連携事業、育児不安、意識付け、育児技術

Abstract

【Purpose】A university developed a childbirth education class for expectant mothers and their families in collaboration with City B. This paper elucidates the significance of this project and clarifies problems related to class management.

【Method】A questionnaire survey was administered to 126 expectant mothers and 103 family members immediately after the class and 65 postpartum women and 38 family members after childbirth. The questionnaire survey investigated attributes, childbirth/childcare situation, relevance of curriculum, and opinions and impressions of the class.

【Result】More than half of the respondents were motivated to participate in childbirth education classes to acquire knowledge about childbirth, learn child-rearing skills and prepare to become parents. Respondents were highly satisfied with the curriculum both after the class and after childbirth. Participants were able to gain confidence and experience realism through the lectures and exercises, making them aware of their roles as parents. The classes reduced expectant mothers' and family members' anxiety about pregnancy, childbirth, and child rearing while raising their awareness. Respondents reported a desire for more experience-based learning opportunities and inclusion of topics related to postpartum and newborn care.

【Consideration】Based on the results of this study, it was shown that these classes to alleviate the anxiety associated with childbirth and child-rearing skills experienced by expectant mothers in City B had played a significant part in maternal and child health improvement. Increased awareness as a parent and motivation for parenting leads to a sense of self-efficacy, which is the reason for participants' desire for more practical and realistic content. Additionally, physical and mental instability after leaving the hospital and feeling difficulties associated with child-rearing tend to occur until families get used to living with newborns. Therefore, it seems that the need for acquiring preliminary knowledge and support after childbirth has increased.

Key Words : Parenting classes, Government-academia collaboration program, Child-rearing skills, Awareness raising, Child-rearing anxiety

* 福岡女学院看護大学　** 独立行政法人国立病院機九州医療センター附属福岡看護助産学校　*** 福岡女学院大学

Ⅰ. 緒言

A 大学の母性小児看護学領域では 2014 年 4 月より官学連携事業の両親学級として「妊娠後期すこやか教室（以下、すこやか教室とする）」に取り組んでいる。2013 年度の B 市の保健師との協議の機会に B 市の母子保健活動の現状と課題について情報交換を行なったことが本事業取り組みのきっかけとなった（福澤 , 2014）。B 市においても妊婦に対する出産準備教育や相談事業の取り組みは行なわれているが妊娠初期の開催に留まり、分娩や沐浴に関する初産婦の不安や相談が多い状況があった（古賀市保健福祉部こども政策課 , 2010）。B 市保健師より A 大学での分娩期を中心とした出産準備教育開催の打診があり、大学の設備の活用と教員の専門的能力の活用により地域貢献活動としてのすこやか教室開催に至った。

すこやか教室は B 市と A 大学の官学連携事業に位置づけられている。これまで母子のケアにかかわる専門職者（看護教員・保育士など）と学生が実施する大学周辺の未就学児とその養育者を対象とした子育て広場や親子サロン・育児講座の開催（大林ら ,2011; 高橋ら ,2016）や地域の子育て支援者と大学・地域・行政など子育て支援関連機関の従事者が協働して地域の子育て支援を向上させる研修会の開催（三好 , 片山 ,2014）など出産後の育児支援に関する報告はみられるものの、行政と共同し、大学施設で出産準備教育を行なう取り組みは見当たらない。そのため本研究では、行政と大学との新たな連携のあり方としての本事業の意義と、より参加者のニーズに沿った教室の企画・運営を推進するための課題を明らかにする必要があると考える。すこやか教室に参加した夫婦の意識や受講後の反応を検証することで本活動の意義や課題が明らかとなり、今後の教室の企画・運営の改善につながる。また、参加者のニーズに応えることが教室に対する参加満足度を高め、分娩期や出産後の過ごし方、育児不安等の軽減につながり、B 市の母子保健活動の充実と推進に貢献する活動となるといえる。

Ⅱ. 研究目的

官学連携事業であるすこやか教室に参加した妊婦とその家族の意識や受講後の反応を検証し、事業活動の意義を明確にすると共に、これまでの活動評価を行ない、今後の教室運営の基礎資料とする。

Ⅲ. 研究方法

1. すこやか教室の概要

表 1　すこやか教室の内容

時　間	内　　容
9:30～ 9:40	オリエンテーション
9:40～10:10	講話　1.出産に向けた心身の準備 2.お産の経過と過ごし方
10:10～10:30	演習　リラックス法(呼吸法・補助動作・パートナー・家族のサポート)
10:30～10:40	休憩
10:40～11:10	沐浴デモンストレーション
11:10～12:00	沐浴体験、参加者同志の意見交換（2014年度） 沐浴体験、育児技術・相談（2015,16年度）

すこやか教室は妊娠 22 週以降の妊婦とその家族を対象とし、2014 年度から年 6 回開催されている。教室の内容を表 1 に示す。A 大学の母性小児看護学教員と学生ボランティアにより運営され、参加希望者は大学サーバー内に設置された専用フォームから直接申し込みを行うか代表教員への電話連絡により参加申し込みを行う。継続支援が必要な参加者がいる際は B 市保健師から教員に事前連絡が入ることや保健師ら職員の一部参加がある。教室開催後には毎回教員から状況報告をし、連携を図っている。経産婦も参加できるよう託児を設けている。2014 ～ 16 年度まで 1 回の開催につき 4 ～ 12 組の参加者があり、年間 39 ～ 46 名の妊婦と 32 ～ 39 名の夫・パートナー（以下、夫とする）・実母・実姉妹(以下､夫・実母・実姉妹を合せて家族とする）の参加があった。3 年とも年間 4 ～ 5 名の乳幼児の託児を行った。

2. 調査対象

2014 ～ 2016 年度に開催した教室に参加した妊婦 130 名とその家族 109 名を教室参加直後に実施する 1 回目の調査（以下、教室参加直後とする）の対象とした。また、上記の対象者の中で出産後の調査の協力に同意が得られた妊婦 110 名とその家族 87 名を 2 回目の調査(以下､出産後とする)の対象とした。

3. 調査期間

2015 年 5 月～ 2017 年 8 月

4. 調査内容

1）調査方法

無記名式自記式質問紙調査

2）実施方法

(1) 調査用紙の配布および回収方法

妊婦とその家族に対してすこやか教室終了時に調査用紙を配布し、教室退室時に所定の箱にて回収した。出産後は、褥婦・家族それぞれ同意が得られた対象へ個別に調査用紙を郵送し、郵送法にて回収した。

(2) 調査項目

調査項目はＢ市の保健師と内容を協議しながら以下の妊婦 12 項目、家族 13 項目を作成した。出産後は 11 項目を作成し、褥婦・家族ともに回答を得た。項目の詳細を表 2 に示す。

表２　調査項目

時期	項目	対象	内容
教室参加直後	a.属性	妊婦	年齢、教室への参加動機
		家族	妊婦との続柄、年齢、性別、教室への参加動機
	b. 出産・育児状況	妊婦	出産回数、里帰りの予定、他の出産準備教室への参加状況
		家族	子育て経験の有無、立会い分娩希望の有無
	c.教室の内容に対する反応	妊婦・家族	講話、リラックス法・沐浴の演習、参加者同士の意見交換もしくは育児技術の演習・相談
	d.教室に対する意見や感想、託児に対する意見	妊婦・家族	（自由記述）
	e.現在の悩みや不安	妊婦・家族	（自由記述）
出産後	a.属性	褥婦・家族	性別、年齢、出産日
	b.出産・育児状況	褥婦・家族	子育て経験の有無、立会い分娩の有無、分娩様式
	c.教室の内容に対する反応	褥婦・家族	講話、リラックス法・沐浴の演習、参加者同士の意見交換もしくは育児技術の演習・相談
	d.出産後に考えた教室に対する意見や感想	褥婦・家族	（自由記述）

(3) 分析方法

調査結果はコード化し、統計解析ソフト SPSS Statistics 22 を用いて基本統計量の算出を行い、一部属性や出産・育児状況との関連の解析には Pearson の $\chi 2$ 検定もしくは Fisher の正確確率検定を行なった。統計学的有意水準は 5%とした。

すこやか教室にて行なわれた講話とリラックス法の演習、沐浴の演習、参加者同士の意見交換もしくは育児技術の演習・相談をリッカート法にて調査した。各内容について、属性及び出産・育児状況によって教室参加直後の反応に有意な差があるか、同様に出産後の反応に有意な差があるかを妊婦・褥婦と家族のそれぞれについて検討した。自由記述は妊婦・褥婦と家族の意見を合わせ、意味・内容の類似性によって質的に分類し、分析した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、福岡女学院看護大学の研究倫理委員会の承認（承認番号 15-4）を受けてから開始した。研究目的、方法、内容等に関する説明文書を作成し、研究責任者が参加者へ教室終了後に口頭および文書による説明を行なった。研究参加の承諾を得られた対象に調査用紙を配布し、無記名にて回答してもらった。その際、答えたくない質問には答えなくてもよいこと、不利益が生じる場合は参加を拒否できること、調査用紙の提出をもって研究への同意とすること、また、調査用紙は無記名のため、提出後は同意の撤回ができないこと、研究参加を拒否もしくは途中で辞退した場合においても教室への参加に影響がないことやＢ市から提供を受ける母子保健サービスに影響がないことを説明した。

回収した調査用紙は研究責任者が鍵のかかる場所で保管し、電子媒体に保存した調査結果のデータはコード化し、個人が特定できないように記号化して統計処理することを併せて説明した。

出産後の調査では、教室終了直後に参加同意を示していても撤回が可能なよう、撤回の意思を示す葉書を同意書に添付して配布し、その葉書が届いた場合は調査用紙を送付しないこととした。

Ⅲ. 結果

1. 分析対象

教室参加直後は、妊婦 126 名（回収率 96.9%）、家族 103 名（回収率 94.5%）から回答が得られた。

出産後は、妊婦・褥婦 67 名（回収率 60.9%）、家族 39 名（回収率 44.8%）から回答が得られた。出産後の調査では、調査時に出産に至っていなかった妊婦 2 名と妊婦の家族 1 名を分析対象から除外した。よって出産後の分析対象は褥婦 65 名、家族 38 名である。

表 3　対象の属性

［人(%)］

		教室参加直後	出産後
平均年齢			
妊婦・褥婦		32.4±4.5歳(126名)	33.5±4.4歳(65名)
夫		33.5±5.4歳(97名)	36.5±6.0歳(35名)
実母		61.6±8.2歳(5名)	53歳(1名)
実の姉妹		30歳(1名)	31.5±2.1歳(2名)
初経産婦の別			
妊婦・褥婦	初産	111(88.1)	56(86.2)
	経産	15(11.9)	9(13.8)
家　族	初産	86(84.3)	32(84.2)
	経産	16(15.7)	6(15.8)
子育て経験人数			
妊婦・褥婦	0人	111(88.1)	56(86.2)
	1人	12(9.5)	5(7.7)
	2人	1(0.8)	4(6.2)
	不明	2(1.6)	0(0)
家　族	0人	86(84.3)	32(84.2)
	1人	8(7.8)	3(7.9)
	2人	4(3.9)	3(7.9)
	3人	2(2.0)	0(0)
	不明	2(2.0)	0(0)
調査時の出産後日数			
妊婦・褥婦　出産後日数			50～240日
平均日数			94.4±38.4日
家　族　出産後日数			57～240日
平均日数			95.7±41.1日

2. 対象の属性

対象の属性を表 3 に示す。

3. 教室参加直後の状況

1）教室参加者の妊娠週数

教室参加時の妊婦の妊娠週数は、妊娠 17 週～39 週であった。参加対象の妊娠 22 週で分けると妊娠 22 週未満の妊婦が 4 名（3.2%）、22 週以上が 122 名（96.8%）だった。参加時すでに正期産の時期となる 37 週以上の妊婦は 7 名（5.6%）であった。

2）他の出産準備教室の受講状況

今回の教室以外で、他の出産準備教室に参加したことがない妊婦は 31 名（24.6%）であった。参加したことがあるものに複数回答で回答を得たところ、病院で実施されている教室に参加したものが 65 名（51.6%）、B 市で行なわれている妊娠初期を対象とした教室に参加したものが 39 名（31.0%）、その他の教室に参加したもの 5 名（4.0%）であった。

3）里帰りの予定

51 名（40.5%）の妊婦に里帰りの予定はなく、47 名（37.3%）は県内に、28 名（22.2%）は県外に里帰りの予定があった。初産・経産での別を図 1 に示

表 4　すこやか教室への参加動機(複数回答)

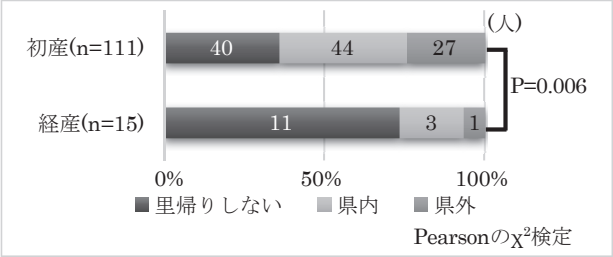
（人）

内　容	妊婦(n=126)					家族(n=102)				
	初産		経産		P値	初産		経産		P値
	あり	なし	あり	なし		あり	なし	あり	なし	
1)分娩に関する知識の習得	81	30	8	7	n.s	35	51	7	9	n.s
2)育児技術の習得	68	43	3	12	.002*	62	24	9	7	n.s
3)パートナー(家族)への意識づけ(妊婦本人回答)	55	56	2	13	.008*	―	―	―	―	
3)妊婦と共に参加したかった(家族回答)	―	―	―	―		36	50	7	9	n.s
4)父親・母親になる準備	84	27	4	11	.000†	74	12	5	11	.000†
5)パートナー(家族)と育児について考えるきっかけ作り	46	65	3	12	n.s	18	68	5	11	n.s
6)興味がある内容だった	37	74	4	11	n.s	14	72	6	10	n.s
7)現在の心配事を解消したいから	19	92	1	14	n.s	12	74	0	16	n.s
8)分娩に不安があるから	21	90	0	15	n.s	5	81	2	14	n.s
9)育児に不安があるから	23	88	0	15	.040†	22	64	0	16	.006†
10)他の参加者と交流したいから	8	103	0	15	n.s	5	81	0	16	n.s
11)他の人の話が聞きたいから	7	104	0	15	n.s	9	77	2	14	n.s
12)保健師に勧められて	3	108	1	14	n.s	0	86	0	16	n.s
13)家族で参加できるから	26	85	2	13	n.s	15	71	4	12	n.s
14)託児があるから	0	111	7	8	.000†	0	86	1	15	n.s
15)土曜なので	20	91	1	14	n.s	21	65	3	13	n.s
16)パートナー(家族)が希望した(妊婦本人回答)	6	105	1	14	n.s	―	―	―	―	
16)妊婦に誘われたから(家族回答)	―	―	―	―		18	68	7	9	n.s
17)立ち会い分娩希望だから	11	100	1	14	n.s	7	79	1	15	n.s
18)本学を知りたかった	1	110	1	14	n.s	2	84	2	14	n.s
19)ポスター・チラシをみて	20	91	3	12	n.s	2	84	0	16	n.s
20)広報をみて	4	107	1	14	n.s	1	85	4	12	.002†
21)なんとなく	1	110	0	15	n.s	0	86	0	16	n.s
22)その他	5	106	2	13	n.s	1	85	1	15	n.s

＊Pearsonのχ^2検定　†Fisherの正確確率検定

す。初産と経産で検討したところ、初産の妊婦の方が有意に里帰りを予定していた。

図1　里帰りの状況(妊婦のみ)



4）立会い分娩の希望状況

家族に立会い分娩の希望を調査したところ、夫の66名（69.5%）が立会い分娩を希望していた。

5）すこやか教室への参加動機

参加動機を表4に示す。妊婦は「分娩に関する知識の習得」「父親・母親になる準備」「育児技術の習得」について半数以上が動機として選択していた。家族は「父親・母親になる準備」「育児技術の習得」について半数以上のものが選択していた。

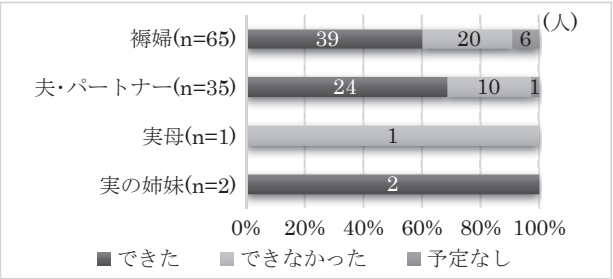
初産と経産で参加動機に違いがあるか検討したところ、妊婦では「育児技術の習得」「パートナーへの意識付け」「父親・母親になる準備」「育児に不安があるから」「託児があるから」の5項目に有意差があった。家族では「父親・母親になる準備」「育児に不安があるから」「広報をみて」に有意な差があった。

4. 出産後の状況

1）分娩様式

分娩様式は褥婦・家族とも80%以上が経膣分娩であったが、帝王切開による分娩と回答した褥婦は12名（18.5%）、家族は6名（15.8%）であった。

図2　立会い分娩の実施状況(褥婦と家族)



2）立会い分娩の実施状況

立会い分娩をできたのは褥婦39名（60.0%）と夫24名（68.6%）、できなかったのは褥婦20名（30.8%）と夫10名（28.6%）であった。予定なしのものは褥婦6名（9.2%）、夫1名（2.9%）であった（図2）。

5. 受講内容に対する反応

結果を表5に示す。「とてもよかった」「まあよかった」を併せ『よかった』、「あまりよくなかった」「よくなかった」を併せ『よくなかった』、「とても役立った」「まあ役立った」を併せ『役立った』、「あまり役に立たなかった」「役に立たなかった」を併せ『役立たなかった』とする。

また、調査対象者全員に自由記述で回答を得た内容を分類したものを表6～9に示す。ただし今回の報告では、コードは最もカテゴリーを表現するもので回答が多かった3項目以内のみを記載する。カテゴリーを【】とする。

表5　教室内容に対する反応

［人(%)］

		教室参加直後	とてもよかった	まあよかった	ふつう	あまりよくなかった	よくなかった
		出産後	とても役立った	まあ役立った	ふつう	あまり役立たなかった	役立たなかった
講話	妊婦	(n=125)	89(71.2)	28(22.4)	8(6.4)	0(0)	0(0)
	褥婦	(n=65)	25(38.5)	32(49.2)	8(12.3)	0(0)	0(0)
	家族	(n=100)	65(65.0)	33(33.0)	2(2.0)	0(0)	0(0)
		(n=38)	15(39.5)	17(44.7)	6(15.8)	0(0)	0(0)
リラックス法の演習	妊婦	(n=124)	89(71.8)	30(24.2)	5(4.0)	0(0)	0(0)
	褥婦	(n=65)	23(35.4)	28(43.1)	12(18.5)	2(3.1)	0(0)
	家族	(n=100)	57(57.0)	38(38.0)	5(5.0)	0(0)	0(0)
		(n=38)	15(39.5)	13(34.2)	8(21.1)	1(2.6)	1(2.6)
沐浴の演習	妊婦	(n=124)	112(90.3)	12(9.7)	0(0)	0(0)	0(0)
	褥婦	(n=65)	46(70.8)	13(20.0)	6(9.2)	0(0)	0(0)
	家族	(n=100)	91(91.0)	8(8.0)	1(1.0)	0(0)	0(0)
		(n=38)	28(73.7)	8(21.1)	2(5.3)	0(0)	0(0)
育児技術の演習・相談	妊婦	(n=74)	55(74.3)	15(20.3)	4(5.4)	0(0)	0(0)
	褥婦	(n=50)	16(32.0)	25(50.0)	9(18.0)	0(0)	0(0)
	家族	(n=60)	44(73.3)	16(26.7)	0(0)	0(0)	0(0)
		(n=28)	12(42.9)	10(35.7)	6(21.4)	0(0)	0(0)
参加者同士の意見交換	妊婦	(n=47)	28(59.6)	9(19.1)	8(17.0)	2(4.3)	0(0)
	褥婦	(n=14)	3(21.4)	3(21.4)	5(35.7)	3(21.4)	0(0)
	家族	(n=39)	13(33.3)	13(33.3)	13(33.3)	0(0)	0(0)
		(n=9)	1(11.1)	3(33.3)	3(33.3)	2(22.2)	0(0)

※網掛け部分は出産後を示す

1）講話の内容の反応

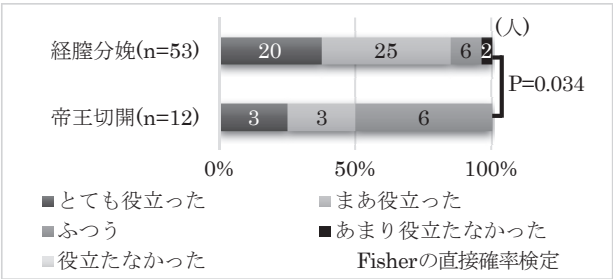
教室参加直後では、妊婦・家族とも90%以上が『よ

かった』を選択していた。出産後の『役立った』の選択は、褥婦・家族とも85%以上であった。『よくなかった』『役立たなかった』との反応はいずれの対象・時期共になかった。これまでの分娩経験や分娩様式で反応に違いがあるか検討したが、妊婦・褥婦、家族とも有意差はなかった。

2）リラックス法の練習の反応

教室参加直後では、妊婦・家族とも95%以上が『よかった』を選択していた。出産後では同様の選択を行なったものは教室参加直後より減少したものの、褥婦では78.5%が、家族では73.7%が『役立った』との反応であった。『よくなかった』との反応はいずれの対象・時期共に認められなかった。出産後では褥婦の2名（3.1%）と家族の2名（5.3%）が『役立たなかった』としており、痛みでそれどころではなかったり、急に分娩が進んだため実施できなかった旨の記載があった。分娩様式でリラックス法への反応に違いがあるか検討したところ、褥婦のみ有意差が見られ（図3）、家族では有意差はなかった。

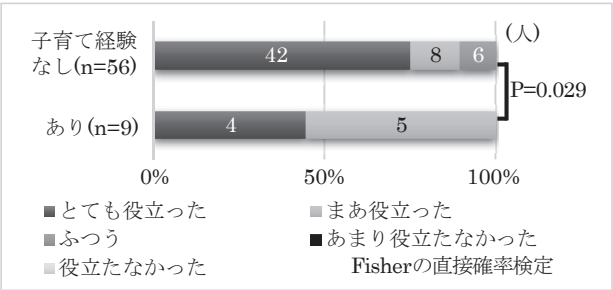
図3　分娩様式とリラックス法の反応(褥婦のみ)



3）沐浴の演習の反応

教室参加直後では妊婦・家族ともほぼ全員が『よかった』を選択していた。出産後でも90%以上が『役立った』と回答していた。『よくなかった』『役立たなかった』とする反応はいずれの対象・時期においてもなかった。これまでの子育て経験で反応に差があるか検討したところ、出産後の褥婦にのみ有意差があり、子育ての経験がない初産の方が「とても役立った」と有意に評価していた（図4）。分娩様式での有意差はいずれもなかった。

図4　子育て経験と沐浴の演習の反応(褥婦のみ)



4）育児技術の演習・相談の反応

教室参加直後では妊婦の約95%、家族は全員が『よかった』を選択していた。出産後ではいずれも80%前後が『役立った』と回答していた。これまでの分娩様式や子育て経験での差はいずれの対象においてもなかった。

5）参加者同士の意見交換の反応

教室参加直後では78.7%の妊婦、66.7%の家族が『よかった』を選択していた。『よくなかった』『役立たなかった』を選択した妊婦2名（4.3%）と出産後の家族2名（22.2%）がいた。後の自由記載で、知らない人の前で不安なことは話しづらいといった意見が述べられていた。出産後ではいずれの対象においても『役立った』を選択したものは40%程度であり、『役立たなかった』ものが20%程度いた。分娩様式や子育て経験で差はなかった。

6）教室で取り上げてほしい内容（表6）

教室参加直後に自由記述で回答を得たところ、7カテゴリーが得られた。【教室の進めかた・場の

表6　教室で取り上げてほしい内容：教室参加直後

（複数回答）

カテゴリー	コード
教室の進めかた・場の設定の工夫	先輩パパママの話
	本当の赤ちゃんの抱っこ
	実習を多く
妊娠中から産後までの夫婦の過ごし方	産前・産後の健康管理（食事）
	出産前後の過ごし方
	出産後のこと・赤ちゃんとの生活
夫の妊婦経験と協力態勢の整備	夫婦の協力態勢の例（産前・産後）
	夫ができること
	パートナーの妊婦体験・妊婦体操
出産準備	分娩の経過・準備・立会い出産
	出産に向けて準備するもの
	呼吸法・ヨガ・ストレッチなどのリラックス法
育児技術	児の栄養に関する内容（母乳・ミルク・離乳食）
	おっぱいマッサージや授乳方法(直接授乳・瓶哺乳)
	育児物品の使い方
子どもの理解	赤ちゃんとの生活
	子どもへの愛情の注ぎ方
	2,3か月の赤ちゃん教室
出産後の母子の病気	出産直後に女性がなりやすい病気
	産後に女性が病気になった時の心構え
	新生児特有の症状・病気

設定の工夫】【妊娠中から産後までの夫婦の過ごし方】【夫の妊婦経験と協力態勢の整備】【出産準備】【育児技術】【子どもの理解】【出産後の母子の病気】があり、【出産後の母子の病気】は家族からのみ挙がっていた。

7）参加しての感想（表 7）

教室参加直後の感想は、【妊娠・出産・育児に関する理解の促進】【家族の参加で親となる意識付けの機会】【知識の習得と体験を通した出産・育児に向かう実感】【不安が解消し育児に対する自信や意欲が向上】などの 6 カテゴリーが得られた。

表 7　参加しての感想：教室参加直後

（複数回答）

カテゴリー	コード
妊娠・出産・育児に関する理解の促進	勉強になった・ためになった・参考になった
	内容が豊富だった・いろいろできた
	沐浴体験・マッサージ・呼吸法の感想
家族の参加で親となる意識付けの機会	夫に体験してもらえてよかった
	夫の育児への関心が増えた・楽しみになった、父親になる意識付けとなった
	お産や産後のこと・育児を具体的に考えるきっかけになった、夫と一緒に育児について考えることができた
知識の習得と体験を通した出産・育児に向かう実感	より実感がわいた・わかない部分もあった
	大変さがわかった・思った以上に体力が必要だった
	沐浴大変そう・緊張した・難しい・早くしたい
不安が解消し育児に対する自信や意欲が向上	不安が解消された
	自分も夫も自信がついた
	育児に前向きになれた・意欲が出た
他の妊婦や教員・学生との交流への評価	他の妊婦と交流が持てた・いろんな人の話が聞けた
	助産師の話が聞けてよかった
	学生と話ができて良かった・対応がよかった
内容や指導への評価	わかりやすかった
	丁寧に教えてもらった・マンツーマンで教えてもらえた・気配りが細やかだった・親切だった
	抱っこ・おむつ交換・沐浴・リラックス法など実体験できて良かった

8）託児に関する意見

託児を利用した対象は 13 組で、託児があることでの参加しやすさや子どもも楽しめる配慮が得られた意見と、あずける時に子どもが泣き申し訳ない気持ちになったという意見があった。

9）妊娠に対する現在の気持ち（表 8）

教室参加直後の妊娠に対する気持ちは、【胎児への思い】【妊娠・出産・育児に対する不安】【妊娠・出産や子どもが増えることに対する楽しみ】【妊娠・出産・育児の実感と心の準備】【妊娠中の妻を労わる夫の思いと行動】などの 8 カテゴリーになった。

表 8　妊娠に対する現在の気持ち：教室参加直後

（複数回答）

カテゴリー	コード
胎児への思い	胎児の成長を実感
	早く我が子に会いたい気持ち
	無事に生まれることを願う気持ち
妊娠・出産・育児に対する不安	不安
	妊娠の経過に不安
	出産が不安・恐怖
妊娠に伴う不調やストレス	早く産んで楽になりたい気持ち
	妊娠前にできたことができないストレス
	妊娠に伴う体調不良の訴え
妊娠中の生活状況	妊娠経過を楽しむ
	妊娠生活になれて楽になってきた
	安定期でゆったり・リラックスした生活
妊娠・出産や子どもが増えることに対する楽しみ	不安と期待・楽しみが半々
	楽しみ・嬉しい
	妊娠できた喜び・幸せ
妊娠・出産・育児の実感と心の準備	妊娠の大変さを実感
	まだ実感に乏しい気持ち
	出産に向けて心の準備が出来てきた
妊娠中の妻を労わる夫の思いと行動	妻をサポート
	妻に対する思いやりと感謝
	妻の体調の変化をケア
他の妊婦や親への気持ちの変化	妊婦に対する気持ちの変化
	親に対する気持ちの変化

10）出産後のすこやか教室への意見（表 9）

出産を経て教室への意見を自由記述で求めたところ、【参加による不安の軽減】【出産・育児のイメージの明確化と実施の状況】【出産・育児開始前に知っておきたかった内容】【体験に対する要望】【夫婦での参加の有効性】【他の参加者との交流に関する意見】などの 10 カテゴリーが得られた。

Ⅳ．考察

1. 官学連携事業としての本事業の意義

B 市の妊婦に対し分娩や育児技術に関する不安を軽減する支援により母子保健向上の一端を担う目的で開催された本事業であるが、今回の結果からその意義は十分に果たされていたことが示された。対象は 9 割弱が初産婦とその家族であり、他の出産準備教室への参加はなく、今回の教室が初めての参加であるものは 4 分の 1 であった。他は妊娠初期を対象とした B 市の教室や受診している分娩施設の出産準備教室に参加しており、参加者の学習意欲と出産準備教室に対するニーズは高いことが

表9　出産後のすこやか教室への意見

（複数回答）

カテゴリー	コード
参加による不安の軽減	参加によって不安が軽減した
	悩みや相談ができてよかった
	忘れていた育児技術を思い出せた・再確認できた
出産・育児のイメージの明確化と実施の状況	学んだことを実践することができなかった・実際のときは忘れていた
	夫が出産時にサポートしてくれた・サポートできた
	子育てに役立っている
教室の内容で役立った内容	育児技術（沐浴・おむつ交換）の練習がよかった
	リラックス法が参考になった
	妊娠中の食事が参考になった
出産・育児開始前に知っておきたかった内容	産んでからのお世話(子どもの泣き止ませ方、寝かせつけ方、室温調節や衣服のことなど)について知りたかった
	呼吸法やいきみの逃し方を知りたかった
	出生後の児の変化について知りたかった
体験に対する要望	夫の妊婦体験があるとよい
	夫に妻の大変さを知ってもらいたい
	育児教室もあるとよい
夫婦での参加の有効性	出産の大変さと育児を夫婦で認識できた
	夫婦での参加によって妊娠・出産のイメージが明確になった
	夫婦で参加すればよかった
他の参加者との交流に関する意見	短時間で知らない人との交流では話しづらい
	他の参加者ともう少し交流したかった
	他の参加者と仲良くなれてよかった
学生についての意見	学生がついてくれたのがよかった
	学生の接遇がよかった
学びの充実の評価と不満点	勉強になった・参考になった
	妊娠中の食事の話しを充実させてほしい
	全体を網羅して学び・経験ができよかった
教室運営の評価と要望	土曜の開催で参加しやすかった
	子育て予定の男性にはぜひ参加してほしい
	妊娠期から市の保健師に相談できる機会があるとよい

わかる。そういった対象の本事業への参加動機は、分娩に関する知識の習得と育児技術の習得、そして親性や親役割獲得に向けた意識付けであった。特に初産の妊婦と家族には表７の『参加しての感想』や表９の『出産後のすこやか教室への意見』内にあるように心配事や出産・育児に関する不安の解消の要望があった。

加えて経産の妊婦とその家族では、これまでの妊娠・出産を想起・確認ができ、託児があることで安心して受講でき、リフレッシュできる機会ともなっていた。本事業と同様に託児を行いながら子育て支援イベントを実施した高橋ら（2016）の報告でも専門家が子どもをあずかることで参加者が安心して自分の時間を楽しめることを述べているが、経産婦とその家族の参加には子どもを安心してあずけられる場が必要である。また、経産婦とその家族の参加により出産を経験した話を共有でき、初産の妊婦と家族にとってはより理解と実感を促進できるピア・エデュケーションの場ともなっており、教室内容の充実という面でも経産婦とその家族の参加はメリットがある。

本事業は母子に対する専門性の高い看護教員が行う教室や託児サービスであり、参加者の人数によっては教員と学生ボランティアの手厚い支援が受けられ、育児技術の習得や現在の妊娠経過、育児の悩みなど相談するのに参加者には最適の場である。実際、相談を行う参加者も多く、不安の解消や軽減につながり、出産や育児を楽しみにする気持ちが高まっている。行政との連携の必要がある対象の参加時は、教室終了後に状況をフィードバックして継続支援につなげることもあり、母子保健における官学の新たな連携のあり方として本事業の意義を達成できているといえる。

2. 教室運営の評価と課題

夫婦での参加も多く、夫自身、不安を持ちながらも積極的に妊娠期にある妻を支援することで出産や育児をともに乗り切り、関わろうとする意欲の高さがわかる。一般的に産後の妻の支援や育児で何をすればよいのかわからず、実感がわかない夫も多い（永森 ,2017）。しかし、妊娠期の過ごし方や分娩に関する話を妻と聞き、リラックス法を実施しながら感覚を確認し合い、夫も実施可能な抱っこやおむつ交換・沐浴といった育児技術の演習を行えた自信が、そして何よりその様子を喜ぶ妻の反応が『父親になる』という意識の向上と実感にもつながり、「受講内容に対する反応」の結果に示された高い満足度として現れていると考える。出産準備教育の目標には、参加者が妊娠・出産・育児に自信と自主性を持って適応し、自身の成長を図れること（石川 ,2017）もあり、本事業でも参加者の反応からこれを達成できたといえる。

教室参加直後では講話、リラックス法、沐浴、育児技術の演習・相談といった受講内容で高い評価を得た。実践的なプログラムを組んでおり、自己効

力感を高め、親性の意識付けや意欲向上の結果と考えられる。一方で表5の「参加者同志の意見交換」の結果から2014年度に実施した参加者同士の意見交換（ピア・ワーク）のみ反応が分散した。その場で初めて会った知らない他者と悩みや困り事を話すのは難しいという意見もあり、2015年度からは抱っこやおむつ交換の演習に切り替え、そのなかで相談があれば対応していくよう変更した。これにより実技内容が増え、実際の体験からより実感も増し、参加動機の父親・母親となる意識付けや育児技術の習得を通して満足度が高まったと思われる。

参加者同士の意見交換は仲間作りにもつながり、両親学級での開催目的のひとつにも挙がるが（古川,2005)、「参加者同士の意見交換の反応」の結果にあるように今回評価した2014年度の教室運営内では十分に図られていなかった。この反省から2015年度の教室からは育児技術の演習の際、教員が参加者の意見を引き出す支援を行いながら質問に答えたり、他の妊婦や家族に問いかける支援を行うことで共に確認する様子もあり、参加者同士の直接的な意見交換の場が持てずとも、様々な妊婦とその家族がどのようなことを知りたいのか、不安なのかを間接的に共有できており、自分だけではない安心につながっている。

また、いずれの教室内容の項目も出産後には満足度がやや下がった。両親学級での演習について出産前後の両方の効果や満足度を検証した先行文献はなく比較できないが、なかでもリラックス法の演習は他の演習項目に比べてあまり活用できなかった様子が伺えた。要因のひとつに、分娩の進行状況や帝王切開になるなど分娩様式の変更で実施ができなかったり、実施の際には助産師が付き添い、産婦の状況に合わせた支援をすることもあって教室で学んだ内容が薄れたことが推察される。しかしここでの学びを元に夫に産痛緩和をしてもらったことや夫自身が産痛緩和をすることで妻と一緒に出産を乗り切ったことを述べるものもおり、教室の内容が意味のないものというわけではない。妊娠期からの夫婦のコミュニケーションを図ることの大切さについては多く述べられており（磯山,2015; 永森,2017; 中島,2016; 岡山他,2017)、リラックス法の演習はそのものの目的だけでなく、妊娠期からタッチングを介して夫婦の相互理解と親密性を維持し、育児期に必要な互いの認識を伝えあうコミュニケーションの練習ともなる有効な演習と考える。

今後の教室への要望は、表6や表9のデータにも示すように時期を問わず体験・実施できるものが多かった。夫の妊婦体験を通して妊娠後期の思うようにいかない体の感覚を共有することで大変さを理解してもらいたい妊婦・褥婦の意向があった。また、出産後ではより実践的な内容が挙がり、育児方法や子どもの理解、産後の身心の変化などの要望があった。出産後の要望に挙がった内容の多くは産後の保健指導で説明される内容ではあるが、出産後まもなくの指導であり、そのまま退院後の育児生活に突入していく。また、1ヶ月健診を終えた後、次の3～4ヶ月の児の健診までは看護者が地域で生活する母親に直に接して母親の異変に早期に関わったり、育児の困難感を抱える母親への支援が途絶えがちな期間であり、自分の心身も子どもの様子もまだ安定していないこの時期の乗り切り方や夫はその支援の仕方を予め知っておきたかったことが推察された。

今回の報告は、B市との連携においての取り組みのため、一般化には限界がある。また、出産後の調査内容は回答時の日数に差があり、出産後の経過日数が回答へ影響を与えた可能性があり、本研究の限界といえる。今後の課題としては、開催回によって参加人数にばらつきがあるため、よりB市と連携をとりながら参加人数を増やしていくことと、コスト面の負担をどのようにしていくかの検討が必要と思われる。これからも対象のニーズに沿った改善を図りながら効果的な教室運営を行っていきたい。

Ⅴ. 結語

すこやか教室に参加した妊婦とその家族を対象に教室参加直後と出産後、教室に対する意識と反応、要望を調査した結果、以下の結論が得られた。

1. 参加動機は、分娩に関する知識の習得、父親・母親になる準備、育児技術の習得が多かった。
2. 受講内容に対する反応は、教室終了直後・出産後共に高い満足感を得ており、講話・演習を通して自信と実感を得て親役割獲得の意識付けとなっていた。

3. 今後のすこやか教室に対して、実施・経験が得られる内容の増加の要望が多くみられ、出産後まもなくだけでなく数ヶ月先までの育児について学びたいニーズが明らかとなった。
4. 妊婦とその家族の妊娠・出産・育児に関する不安の軽減と意識の向上が図れており、連携事業の意義が明確となった。

文献

福澤雪子 , 椎葉美千代 , 奥野由美子他（2014）. 古賀市と連携して看護大学で母親教室を開催し古賀市の母子保健活動推進に貢献する . 2014 年度学院活性化助成金教育研究活動課題報告書 .

古川亮子（2005）. 新潟県の妊婦教育における両親学級と母親学級の実態と課題（第一報）. 母性衛生 ,46（2）,348-357.

石川紀子（2017）. 特集　今どきのマタニティークラス実践例 11　私の施設のここが自慢　総論 : マタニティークラスに求められるもの . ペリネイタルケア ,36（1）,16-18.

磯山あけみ（2015）. 勤務助産師が行う父親役割獲得を促す支援とその関連要因.日本助産学会誌,29（2）,230-239.

木村弘子 , 星田秀子 , 菊池千代子（2005）. 参加型両親学級の企画運営を通して - 父親のニーズと満足感を考える -. 日本看護学会論文集　母性看護 36,9-11.

古賀市保健福祉部こども政策課（2010）. 古賀市次世代育成支援後期行動計画 .

三好年江 , 片山啓子（2014）. 大学と地域が共同する子育て支援者研修の成果と課題 -「にいみ子育てカレッジ」2013 年度の取り組みより - . 新見公立大学紀要 ,35,149-152.

永森久美子（2017）. 特集　助産師は父親をどう支えるか　助産師から父親に伝えたいこと . 助産雑誌 ,71（10）,769-773.

中島久美子 , 早川有子 , 常盤洋子（2016）. 妊娠機および産後における夫婦の関係性 - 夫婦関係満足度 , 妻が満足と感じる夫のかかわりの関連 -. 母性衛生 ,57（1）,82-89.

岡山久代 , 内藤紀代子 , 寺坂多栄子他（2017）. 特集　妊娠期の両親学級で行うプレママ・パパへのメンタルヘルスプログラム . 助産雑誌 ,71（10）,764-768.

大林陽子 , 岡田由香 , 緒方京他（2011）. 大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価 . 愛知県立大学看護学部紀要 ,17,33-39.

高橋順子 , 小川佳代 , 近藤彩他 . 大学を拠点とする子育てイベントに参加した母親の反応 . 四国大学紀要 ,46,1-8.